

# 豚の下顎骨懸架

## — 弥生時代における辟邪の習俗 —

春 成 秀 爾

---

### はじめに

- 1 日本の考古資料
- 2 アジアの考古資料

### 3 アジアの民族資料

- 4 豚の下顎骨懸架の意味
- 

### 論文要旨

近年、佐賀県菜畠、奈良県唐古・鍵など西日本の弥生時代遺跡から、豚の下顎骨に穿孔し、そこに棒を通して、下顎連合部を棒に掛けた例が発掘され、その習俗は中国大陸から伝來した農耕儀礼の一つであるとする見解が有力となっている。

豚の下顎骨に穿孔した例は、中国大陸では稀であるが、豚の下顎骨や頭骨を墓に副葬したり、どこかに掛けておく習俗は、新石器時代以来発達しており、西南部の少数民族の間では、今日にいたるまでその習俗を伝えている。

海南島の黎族は、人が亡くなると、牛や豚を殺して死者の靈魂を送る。そのあと、殺した豚の下顎骨を棺の上に置いて埋めるか、または棒に掛け墓の上に立てる。また、雲南省の納西族は、豚の下顎骨を室内の壁に掛け家族の安穏の象徴としており、誰かが亡くなると、村の外に捨てる。

豚は、中国の古文献によると、恐怖の象徴であって、豚の頭骨や下顎骨をもって、邪惡を退け死者の靈魂を護る、とされる。

中国新石器時代には、キバノロや豚の牙を装着した呪具を死者に副葬する習俗が、豚の下顎骨の副葬に併行または先行して存在する。豚の下顎骨が、死者の靈魂を送る、あるいは護ることができたのは、大きく曲がった鋭い牙すなわち鉤をもっていることに求めうる。鉤が辟邪の効果をもつことは、スイジガイの殻を魔除けとして家の入口に掛けておく民族例があり、また、楯に綴じ付ける巴形銅器の存在から弥生時代までさかのぼることが推定されている。豚の下顎骨は、鉤形の牙と、豚の獰猛な性格によって、死靈や邪靈に対抗することができたのであろう。また、時としては羊や鹿の下顎骨をもってそれに代えているのは、下顎骨そのものがV字形の鉤形を呈しているからであろう。

弥生時代例は、住居の内部や入口あるいは集落の入口などに掛けたり、死者がでたり、災厄にあったりすると、鉤部に死靈や邪靈が引っかかっているとみなし、居住区の外に捨てたか、または逆に、死者を護るために墓に副葬したのであろう。

豚の下顎骨を辟邪の呪具として用いる習俗は、朝鮮半島ではまだ知られていないが、弥生時代早期に渡来した人々が稻作や農耕儀礼とともに西日本にもたらした、中国新石器時代に起源をもつ辟邪の習俗であったことは確かである。